

石切テラス プロジェクト報告書

antelope 佐藤貴洋
二瓶賢人

1. プロジェクトの概要と目的

石切テラスは、栃木 DC* 期間中の宇都宮における取り組みの一つとして、過去に大谷石の加工場として使われていた建物を、日常の休憩や様々なイベントを行うことが出来るよう整備したテラスです。このテラスを通して大谷地域の魅力を再認識するとともに、地域の未来の風景を多くの人で想像していく場をつくることを目的としています。

*DC: デスティネーションキャンペーン (JR グループ 6 社と地域による観光キャンペーン)

2. 大谷地域の概要と石材産業

宇都宮市中心市街地から北西約 8km に位置する大谷地域は、緑色凝灰岩の一種である「大谷石」の産地として発展してきました。大谷石は、耐火性・調湿性、加工のしやすさ、鉄道などによる流通網の確立などを背景に、全国に広く流通してきました。

2.1. 建材としての大谷石

大谷石は、古墳時代の石積みの石室や様々な寺院等に使用されるなど、古い時代から地域の石造文化を担ってきました。宇都宮城の修築 (1619 年) や宇都宮二荒山神社の石垣の修築 (1846 年) の際には、大量の大谷石が使用され、明治時代以降には様々な施設や倉庫、個人宅の蔵や石塀などにも広く使用されるようになりました。中でも、F・L・ライトが設計した東京の旧帝国ホテル (1923 年) に大谷石が使用されたことや、関東震災によって大谷石の耐火性が認められたことにより、建材としての大谷石は全国に広く認知されるようになりました。

2.2. 石材産業の歴史と流通

古くから宇都宮周辺で様々な用途に渡って使用されてきた大谷石ですが、商品として他地域に展開していたのは江戸時代以降といわれており、明治初期頃まではほとんどが農閑期の副業としての小規模な採掘となっていました。運送は荷馬車が主力で、京浜地方には鬼怒川水系による水運を利用していたため、限られた量を限られた範囲までしか運ぶことができませんでした。その後、軌道が敷かれたことで市場が拡大し、専門の採石業者が増加し、農家との分化が進みます。明治 30 (1897) 年に、宇都宮軌道運輸によりレール上の貨物車両を人間が押す「人車軌道」が開通し、軌道は年々延伸されていきました (図 1)。その後明治 39 (1906 年) には、軌道事業者である野州人車鉄道を合併し宇都宮石材軌道株式会社となりました。これにより石材の輸送が活発化していきました。大正 4 (1915) 年には、蒸気機関車で石を輸送する「軽便鉄道」が開通し、大谷石の流通が大幅に拡大されました。この頃、大谷地区は観光地としても知られるようになり、人々は市内から人車軌道の旅客車で大谷を訪れ、石材は軽便鉄道の貨物車により出荷されていました。軌道の沿線には集積所が点在しており、軌道を通じて石や人が行き来する、活気のある光景が見られました。その後、戦後の昭和 30 (1955) 年頃から、輸送にトラックが導入されるようになり、昭和 30 年代後半には鉄道輸送にかわって積み替えがなく、戸口から戸口へ輸送が可能なトラック輸送が一般化していきます。また、同時期に裁断・採掘機の開発により採掘の機械化が進み、品質が安定し生産量が増大しました。高度

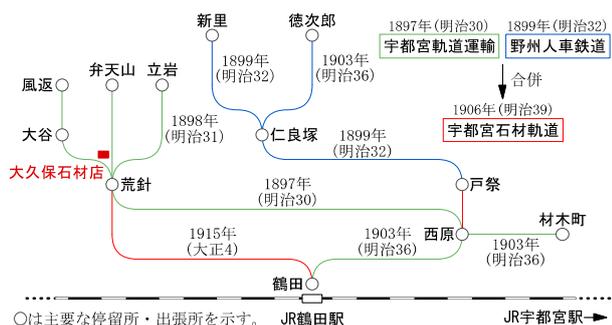


図1 石材軌道モデル図と軌道沿線の様子 (左上: 輸送駅構内の様子、左下: 人車軌道における旅客車の様子、右: 石の積み込みの様子)

本計画では旧加工場を石産業において重要な役割を担った産業資源と捉え、大谷地域全体に広がる観光資源を活用したエリア形成の一端として機能させることにも重点をおいて計画が進められました。

4.1. プロジェクトチームの発足

プロジェクトを進めるにあたり、旧加工場が歴史や周辺エリアの文脈を引き受けて将来にわたり地域に根付くとともに、地域外との交流を促す新規性をおびた場とすることを目的としたチームづくりがなされました。具体的には、宇都宮市と大谷に工房を構える陶芸家・谷口勇三氏を中心に市内の建築家、宇都宮美術館で企画展の実績があるデザイナーのキギ、そのキギと共同してきたコピーライターに加藤麻司氏など、地縁や新規性を意識したプロジェクトチームが発足されました。

4.2. 旧加工場について

敷地は県道 70 号線から大谷地区へのメインアプローチである大谷観音線の入口付近に立地しており、旧加工場は基壇とその上部の鉄骨造の架構により構成されています（図3）。基壇は道路から高さ 1.3m ほどの大谷石積みによる擁壁が、26m×9m ほどの台形を描くように外周をめぐるっており、その上部は、一部の大谷石敷を除き大半が粉状の大谷石で敷き詰められています。鉄骨造の架構は、軒高 3m、棟高 5.5m ほどの山形ラーメンが街道と平行に 6m 間隔で並列され、その上にスレート製の屋根が架かっています。東面の一部に大谷石塀、南東の角に大谷石積みの小屋が併設されており、その他の西、南、北面は周辺に開放されたつくりとなっています。

採掘業は 15 年ほど前に廃業しており、旧加工場は大谷石の残在庫を保管する場所として利用され、一部においては販売もされていましたが管理が行き届かない低未利用地の状態が長らく続いていました（図4）。その為、基壇の擁壁や雨樋、小屋の屋根の一部が破損するなどの建物の老朽化に加え、不法投棄なども見受けられ、旧加工場内や近隣において悪影響を及ぼして

いました。

4.3. 歴史を通じて将来に開かれた場づくり

旧加工場を、かつて大谷の町に活気をもたらした石産業の一翼を担った場所と捉え、脈々と受け継がれてきた大谷の記憶が継承される場となるよう意識的に取り組みました。例として、大谷石の加工が行われていた時から残る場の質が損なわれない様に、脈絡のない設えや過剰な更新を避けるよう留意しました。一方で、将来において多様な可能性に開かれた場となる事を意図し、特定の使い方や趣味性に限定された計画にならないよう冗長性を持たせる事や、新規性を持たせる事においても意識的に取り組みました。また、加藤氏の提案で先述した意図を汲み取れるような名称として、この場所を「石切テラス」と名付けました。

4.4. 周辺エリアからみたテラスの位置づけ

石切テラスが、大谷地区の玄関口に立地していることを踏まえ、観光に来た人々を迎え入れる役割を担い、かつ、大谷観光のメインである地下のイメージとは違う、もう一方の地上における石産業の形跡に触れる場となることを意図しています。また、石切テラス周辺においては、公園やベンチが置かれ休憩できる場所が不足していると思われたため、観光客に限らず地域住民においても日常的に休憩や簡単な飲食が出来たり、利用者間で交流がうまれたりする、公園のような場所としても機能するよう検討しました。

4.5. テラス竣工までのプロセス

最初に建物の大きさ、構成、状態の把握、残在庫として散在している大谷石の大きさや数量、位置、状態をプロットして、図面や模型(1/30)を作成し現状を客観的に把握しました。その後、旧加工場の利用のされ方にどのような可能性があるか検討していきましました（図5）。例としてライブ演奏、飲食イベント、物販市、映画鑑賞、餅つき等の地域行事などの、多岐にわたる活動の受け皿となるようベンチやテーブルとして機能する大谷石のレイアウト、床やアプローチの整備などハードの検討を重ねていきました。加えて、老朽化



図3 基壇と屋根架構で構成された旧加工場



図4 放置された旧加工場内の様子



図5 模型等を利用した打合せの様子

した建物がリニューアルされた事をアピールできるようなアイデアも出され基本計画を決定していきました。

その計画を元に工事が実施され、破損した雨樋や重量鉄骨によるレール等の解体撤去、砂利敷きによる床の均し工事、椅子やテーブル、階段状のアプローチ、及び基壇の補修などの石工事、サインや塗装による仕上げ工事の順に進み、4月のオープンに至りました。また、石工事は大谷地区の石工が請負い、重量鉄骨によるレールの解体撤去工事は近隣の鉄骨業者が請負ったことなど、地域の事業者も参加して場がつけられたことで、地域との関わりが強化されるきっかけになりました(図6)。

4.6. 石切テラスについて

敷地の西には、四季にあわせて装いを変える戸室山や民家、田畑などののどかな風景が広がっています。道路より1m程高い基壇の上に身を置くと、西に広がる風景が街道を走る車と干渉することなく、長さ26m程の軒先と基壇により切り取られる豊かなパノラマを望むことが出来ます。そのパノラマとテラスでの体験が有機的に結びつくように、残在庫の大谷石を利用してテラス全体に西に向かって座ることが出来るベンチ

を設けています。具体的には、幅30cm、長さ90cm、高さ15cmの大谷石を2段積みで一組とし、約13m×8mの範囲に広場と通路を設けながら、軒と平行に5列、奥行き方向に9列、全体として35組のベンチを配置しています。また、前述した広場が約3m×9mの大きさで中央に設けられており、ライブ演奏時のステージや、飲食イベント時のテーブルを置くスペースなど、多様な用途での利用を可能にしています(図7)。粉状の大谷石に覆われていた床は歩行しやすいよう砂利敷きとして整備し、アプローチは北東にあった小さな階段に残在庫の大谷石を追加し幅を広くすることで、基壇の上に登りやすいよう整備しています。利用せず余った大谷石は基壇の南西に整列させ、加工場としての記憶を留めた場として設けています。また、キギのデザインによる、過去に石産業を支えたつるはしで作業をする石工をモチーフとしたネオンサインや、大谷街道沿いの金色に塗装された列柱、谷口勇三氏により、大谷石積み的小屋内にて、その場と共生するような自作の陶器によるアートの展示空間がつけられたことで、旧加工場がリニューアルされたことをアピール出来る設えとなりました(図8)。また、加藤氏による、大

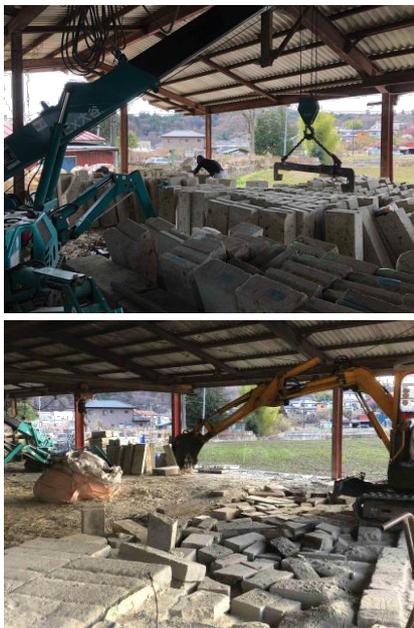


図6 地域の石工による工事の様子

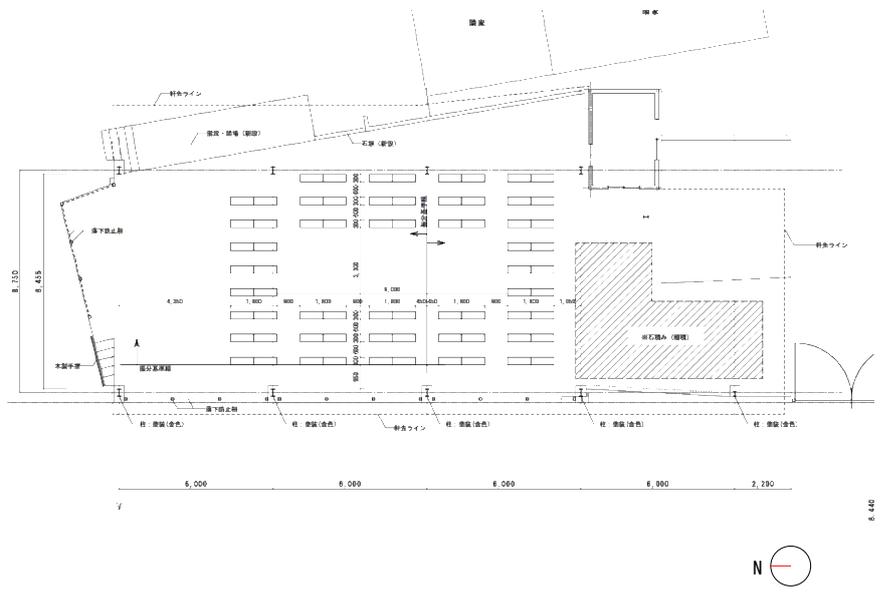


図7 石切テラス平面図



図8 石工をイメージしたネオンサイン



図9 石のベンチが並ぶ内部の様子



図10 軒先と基壇に切り取られた豊かな風景

谷の未来を想像していこうとする石切テラスのストーリーを掲載した案内ハガキも作成されました。

以上のように、かつて石産業の一翼を担った旧加工場は、地域にとっての新しい賑わいや、憩いの場として、大谷の風景の中で東屋のように佇むテラスとなり、旧加工場や大谷地域が持っている豊かさを体験することができる場として再生されました（図 9, 10）。

5. 今後の展望

5.1. 石切テラスの運営

平成 30 年度は、テラスの企画・整備に関わったプロジェクトメンバーが中心となり、ピクニックや映画鑑賞会、ワークショップ、舞台、マルシェイベントなどの企画・運営を行い、定期的に情報発信を行ってきました。今後は、自立的・継続的な運営のために、地域主体による運営体制を検討し、石細工体験や農業体験など、より大谷地域に根ざしたイベントも実施していけるとよいと考えています。加えて、基壇上にある小屋の屋根の葺き替えなど、ハード面の追加整備も計画しています。

5.2. インフラの整備

現在の大谷地域は、主要な動線である大谷観音線が、片側一車線で歩道が十分に整備されていないため、徒歩や自転車による移動が危険な区域があり周遊しにくいことが問題点としてあげられます。地域のインフラの整備を進めることで、点在する観光スポットを徒歩や自転車で安心して周遊できるエリアの構築が可能になると考えられます。その際、石切テラスが日常の休憩やイベント等の受け皿として機能し、脈々と受け継がれてきた石産業や、他の観光資源と連携することで、多様な人々の活動が地域に表出する、賑わいのある大谷の風景が形成されていくと考えます。